

JF日本語関連事業紹介

にほんごかんれんじぎょうしょうかい

国際交流基金日本語国際センター 15周年記念公開イベント

こくさいこうりゅうききん にほんごこくさい しゅうねんきねんこうかい

「日本語で話ませんか」 概要報告

にほんご はな がいようほうこく

2005年3月12日(土) 13:00~17:30実施

ねんがつにちど じっし

日本語事業部企画調整課

にほんごじぎょうぶきかくちやうせい

<センターの活動を日本国内へもアピール>

国際交流基金(以下、基金)が、海外に住む日本語教師のための研修や、日本語学習教材の開発を主な目的とした日本語国際センター(以下、センター)を1989年に開設してから、15年が過ぎました。これまで約6,000人の世界各国の日本語教師が同センターで研修を受け、海外における日本語教育を支えています。2003年に行われた海外日本語教育機関に関する調査では、海外在住の日本語教師は約33,000人を数えました(うち、日本語を母語としない教師は約7割)。単純計算では、世界の約5分の1の日本語教師の方々がセンターの関係者ということとなります。本誌の読者の中にも、センターでの研修を懐かしく思い出してくださる方が多くいらっしゃるのではないでしょうか。内外の日本語教育関係者にはよく知られている同センターですが、日本国内では、一般的にまだまだ知名度が低いのが現状です。また、海外で日本語を学ぶ方が200万人以上いるという事実も、日本国内ではそれほど知られていません。そのため、このたびのセンター設立15周年の機会をとらえ、日本語国際センターの活動や海外の日本語教育の現状について、より多くの方々を知っていただくこと、公開イベントを開催するようになりました。

<15周年記念公開イベントの概要>

わずかが半日の日程ではありましたが、後述するシンポジウム形式の座談会(座談会の模様はこの4月にNHK教育テレビで放送されました)、日本語教授法のミニ講座、センター図書館が所蔵する海外で制作された日本語教材や、海外の日本語教育機関からご提供いただいた授業風景の写真などの展示、センターに滞在中の研修生と参加者が日常生活や習慣などの違いについて日本語で話し合う異文化交流セッション、基金が開発したインターネット事業である「みんなの教材サイト」や「すしテス

ト」の体験コーナーなど、様々な催しを用意しました。

当日は、関東圏の方だけでなく、九州など遠方からも含め、200名以上の参加者にお越しいただき、活気あふれるイベントとなりました。以下に、今回のイベントの中心であった座談会について、その概要をお伝えいたします。

<座談会「日本語を学ぶこと、教えること」について>

今回の座談会は、海外で日本語を学び現在は日本で仕事をしている元学習者3名と、海外で日本語を教えたことがある教師3名に、それぞれの学習あるいは教授経験をお話しいただくことを通して、海外で日本語を学んだり教えたりすることとは具体的にどのようなものなのか、またその課題とは何かをあぶり出そうという試みでした。学んだ側として、中国出身の孫健娜さん(北京外国語大学日本語学部)に入学し初めて日本語学習を開始。その後、東京大学大学院留学、北京日本学研究中心^{※1}を経て、

現在はソニー・ヒューマン・キャピタル株式会社勤務の、米国出身のジニー・パーカーさん

(高校生の



〈座談会〉



〈教授法ミニ講座〉

時に姉妹都市交流で2週間日本に滞在。プリンストン大
 学入学後、本格的に日本語学習を開始。大学のインター
 ンシッププログラムで大阪にある企業で1年間OLを経
 験し、その後もさらに日本を探求すべく滞在を続け、現
 在はウォールストリート・ジャーナル誌記者)、イタリ
 ア出身のロマネエルロ・ドナトさん(子供の時に見た日
 本のアニメや地震に興味をもち、ナポリ東洋大学に入学
 して日本語学習を開始。大学生の時に短期で初来日、卒
 業後も日本と関わりのある企業で仕事をする。現在イタ
 リアのタイヤ・メーカー、ピレリ株式会社日本支社マー
 ケティング部長)に日本語の学習経験をお話いただきま
 した。孫さんは、中国人の日本語の先生が作成した教材
 の例文をひたすら覚えたこと、日本人留学生が多く実際
 に会話する機会に事欠かなかったことや、北京日本学研
 究センターで日本人の教授陣の下、日本語で議論したり
 レポートを書いたりしたことが、日本語上達に役立った
 と思う、と述べられました。パーカーさんは、日本での
 ホームステイや会社の寮で日本人と生活を共にしたこと
 や実際の会社勤務経験が、ドナトさんは日本語会話のテ
 ープをたくさん聞いたことが、日本語の上達に役立った
 と話されました。また、来日後に、日本語で苦勞した点
 としては、孫さんは、話し言葉と書き言葉の違いや、和
 語と漢語の使い分け(どのような時に漢語を使うかの判
 断)が難しい点、パーカーさんは関西弁の語彙やアクセ
 ントがそれまで学校で習ったものと全く異なっていた点
 や経済記者として日本語の経済用語や業界用語と今も格
 闘している点、ドナトさんは自分と相手との人間関係の
 距離の取り方を敬語の使用量で表さなければいけない点
 が難しいと述べられました。

教えた側としては、香港出身で学んだ側としての経
 験もお持ちのサウケン・ファン先生(香港の中文大学
 で日本語を専攻、オーストラリアの大学院で第二言語習
 得等を研究しつつオーストラリア人の学生に日本語を教
 え始め、日本人と結婚後来日、現在は神田外国語大学助
 教授)、金田一秀穂先生(杏林大学教授で、基金の派遣
 で中国や米国で日本語教師として教鞭を取られた経験有
 り)、横山紀子先生(センター開設以来、専任講師とし
 て海外の日本語教師の指導に携わる。シンガポール、米
 国、中国でも教鞭をとられた経験有り)のお三方に、ご
 自身の日本語観や言語習得観もまじえながらお話をし
 いただきました。ファン先生からは、日本の漢字にはな
 い文字を使う樊という中国名の姓と夫の姓である日本名
 とをどのように使い分けしているかのエピソードを通して、
 母語ではない日本語を使うことで自分自身を新たな視点



〈世界の日本語教材展〉

から眺めることが
 できる面白さを語
 ってくださいまし
 た。同様の観点か
 ら、金田一先生は、
 外国語を学ぶこと
 と同様に、日本語
 を外国語として教



〈海外での授業風景の写真などの展示〉

えることによっても、日本人としての自分自身を掘り下
 げて考えることができる醍醐味を語られました。横山先
 生は、シングリッシュと呼ばれる実用優先のシンガポ
 ール英語に出合っ、それまでの正確さ優先の英語に対す
 る強迫観念が崩れ去ったこと、移民の多い米国では生活
 の隅々で英語を母語としていない人への配慮がなされて
 いた点、コミュニケーション・アプローチ全盛の日本から
 飛び込んだ中国で徹底した暗記暗誦の学習法によって高
 い日本語力を身につけた人々を目の当たりにし、そうした
 学習法に対する認識を改めたこと、などを語られまし
 た。

また、孫さんやパーカーさんが、「いまいち」など日
 本での生活や日本人とのコミュニケーションの中でしか
 その語感を身につけられない日本語が多いことを指摘さ
 れました。それに対し、横山先生からは、そうした環境
 を得難い海外での日本語学習は一見デメリットのように
 思われるが、逆にそうした環境だからこそ育まれる熱意
 も外国語習得には大事である点を指摘されました。その
 実例として、センターに研修に来る来日経験がない日本
 語教師が大変流暢な日本語の使い手である場合が珍しく
 ないことを挙げておられました。

他にもパネリストからは興味深いお話が次々と披露さ
 れ、聴衆も熱心に耳を傾けている姿が印象的でした。こ
 れを機に海外における日本語教育について、日本国内で
 の関心がさらに高まり、日本語での交流が益々活発にな
 ることを願っています。

※1 基金と中国政府が共同で運営する大学院機能を持つ研究機関